



好学愛知 自律敬愛 質実剛健

鶴鳥イ言

鹿児島県立鶴丸高等学校

〒890-8502 鹿児島市薬師二丁目1番1号

TEL 099-251-7387 FAX 099-255-3433

http://www.edu.pref.kagoshima.jp/sh/Tsurumaru/top.html

ものごとのかかり方

教頭 福留 和宏

「この・・・は」という表現が気になることがある。例えば、「この国は」、「この学校は」、「この家族は」などである。この場合、発言したり、書いたりしている人は、その集団に属している、多くの場合、その集団に対して肯定的であるか、冷やかであるかである。「この家族は」という場合と「うちの家族は」という場合では、その続きに違いがありそうである。

ものごとに対して否定的な評価をすることをポイントとしてしているのではなく、自分がそれに含まれる集団に対する否定的な評価の在り方について考えているのである。私だけの感覚かもしれないが、「この」とするだけで、客観的に捉えようとしているのだが、そこに属している本人の主体性はどうなっているのか気になるのである。

客観的に評価すること、人ごととして評価することは異なる。自分が属している集団について、一構成員がその集団全体を主体的に引き受けることは難しく、その必要はないかもしれないが、自分がかわっている部分については、相応の責任は引き受ける必要がある。その集団に属しているが、気持ちはその集団を離れているか、離れたいと感じているかのいずれかであってものである。

この「化」の進行は、世の中のものごとへの共感の在り方にも影響を及ぼしているような気がする。世の中のいろいろなものごとに対して、本当に他人事のようにコメントする最近の風潮がある。ものごとをあまりにも客観的に見すぎることが、解説、評論の行き過ぎになり、当事者の具体的な事情を無視した発言、捉え方につながることも否定できない。世の中のあらゆることを、主体的に自分のこととして捉えて、共感しながら生きて行くことは難しいが、私たちは、世の中のものごとに対してどのようになら主体的に生きていくのかを、常に考える必要があるのだから。

6月の行事予定

6月	
1月	全校朝会 集団読書(1年) 中間考査時間割発表
2火	
3水	PTA総務部・学年代表者会
4木	
5金	
6土	
7日	第1回英検一次試験
8月	中間考査(1日目) 3年学力検討会
9火	中間考査(2日目) 中高連絡会
10水	中間考査(3日目) 部活動生集会 学校安全の日
11木	クラスマッチ(午後)
12金	クラスマッチ(終日)
13土	
14日	
15月	学年朝会
16火	3年進路講演会
17水	
18木	
19金	
20土	悠学講座① 3年小論文模試
21日	
22月	全校朝会 第1回学校関係者評価委員会
23火	
24水	外務省高校講座 45分6限授業
25木	
26金	45分7限授業
27土	
28日	県職員採用試験会場
29月	学年朝会 1・2年実力考査時間割発表
30火	中掃除

生徒みんなで作っていく

五月八日、前期生徒総会が開催された。前年度の活動報告、決算報告、本年度の予算案の承認などが行われた後、第三号議案として「不要物の持ち込みについて」というテーマで全校生徒が協議を行った。



先日、G.O鶴丸セミナーのことで、本校の卒業生と打合せをしお礼を言ったところさりげなく「for others」です。ここからと返された。そこには、「others」への対応ではなく、それと自分が関わり合おうとする「for others」の意志が感じられた。この方は、鶴丸高校とのかかわりに限らず、身の周りの多くのものごとに対して、うまく主体性を発揮しながら生活していることが想像された。そして、鶴丸高校を、「この学校」と言うことはないのだからと思った。

名著を皆で味わう

五月十八日、三学年の集団読書が実施された。川端康成の『古都』(新潮文庫)を読み、「伝統的な日本の美しさを描いた文学作品に触れるとともに、運命に翻弄されつつも強く生きる人間の姿について級友と意見を交わし合う。」という主題のもと、各学級で議論が展開された。集団読書を初めて見学した一年生の男子生徒は、「三年生の積極的な議論に参加する姿に感銘を受けた。さすが鶴丸の先輩だ。」と感動しきりであった。以下は、三年生の感想文である。



『古都』は、平易な文章ながら、京言葉の独特な言い回しと共に自然や季節の移ろいが繊細に美しく描かれている。千重子の感じている生きることへの寂しさは、庭のみみじの樹に咲くすみれに象徴的に表現されている。旧家の問屋の娘で、不自由なく育った千重子の物語だが、京都の華やかな祭りも桜の季節も静かどこか寂しく感じる。それはきっと千重子の出自が捨て子であったからだろう。

しかし、生徒の中から「間接的」には迷惑をかけているという意見や、ルールの中にこそ自由が存在するのだから、自己の勝手な判断でルールの解釈を都合良く変更することはあってはならないという意見、さらには、ルールの中で最大限自由であるために、生徒手帳を熟読すべきであるという意見などが出された。

自分の運転を振り返ろう

五月二十日、交通安全教室が行われ、教材映像の視聴後に、乗用車、自転車、歩行者のそれぞれの場合に分けて、安全な通行についての講話があった。講師の、鹿児島西警察署交通課下田公裕氏は、「近年、鹿児島県の交通死亡事故は増加傾向にあり注意が必要である。また、自転車に乗るものが加害者になる交通事故が増えている。世間の認識は、賠償の裁判が増えている。世間の認識は、自転車はもはや車両であるため、備えが必要である。」とのことであった。生徒は認識を新たにし、気を引き締めていた。

前期集団読書のテキスト
一学年 南木佳士
『こぶしの上のダルマ』(文春文庫)
二学年 向田邦子
『父の詫び状』(文春文庫)
三学年 川端康成
『古都』(新潮文庫)

物語が書かれた当時は、「家」の意識が強く、家業を継ぐことや結婚にもあまり自由がない。その中で、決して交わることのなかった双子の姉妹として千重子と苗子が出会えたことは幸せだったろう。生い立ちの全く違う苗子の野性的な強さに触れ、また、自分に姉妹があることで千重子は強くなったと思う。苗子もまた、ただ強いだけでなく、千重子の幸せをひたすら願う慈愛にあふれていた。

ストレスと上手につきあおう

本年度も一年生を対象に、LHR等の時間を利用して、ストレスマネジメントの講習が実施された。講師に佐伯陵子氏(日本ストレスマネジメント学会理事)をお迎えして、講話と実技を組み合わせた形式で行われた。体と心の関係の講義を受けた後、生徒たちはフロアに横たわり、体が心のように影響を及ぼすのか、また、体の状態が心のように影響を受けるのかを体験を通して実感していた。佐伯氏は、自己の心身に意識を向け、その状態を鋭敏に感じ取ることの大切さを生徒に繰り返して語りかけていた。生徒も大変リラックスできたようで、途中で眠りに落ちる生徒も見られた。「鶴丸生は黙っていても頑張る。だからこそ、心身の力を適切にコントロールしながら抜くことが大切」とおっしゃっていたことが印象的であった。

PTA総会 開催される

五月十三日、平成二十七年PTA総会が開かれた。前年度会務報告、前年度決算報告及び監査報告、今年度事業計画及び予算案、今年度役員選出等についての協議が行われ、議案については全て承認された。

本年度の役員は次のとおり、
会長 丸山健太郎(31R)
副会長 石丸恵子(38R)
副会長 和田茂(22R)
監事 城光寺(37R)
監事 德利浩(24R)

五月二十日、交通安全教室が行われ、教材映像の視聴後に、乗用車、自転車、歩行者のそれぞれの場合に分けて、安全な通行についての講話があった。講師の、鹿児島西警察署交通課下田公裕氏は、「近年、鹿児島県の交通死亡事故は増加傾向にあり注意が必要である。また、自転車に乗るものが加害者になる交通事故が増えている。世間の認識は、賠償の裁判が増えている。世間の認識は、自転車はもはや車両であるため、備えが必要である。」とのことであった。生徒は認識を新たにし、気を引き締めていた。

本年度も一年生を対象に、LHR等の時間を利用して、ストレスマネジメントの講習が実施された。講師に佐伯陵子氏(日本ストレスマネジメント学会理事)をお迎えして、講話と実技を組み合わせた形式で行われた。体と心の関係の講義を受けた後、生徒たちはフロアに横たわり、体が心のように影響を及ぼすのか、また、体の状態が心のように影響を受けるのかを体験を通して実感していた。佐伯氏は、自己の心身に意識を向け、その状態を鋭敏に感じ取ることの大切さを生徒に繰り返して語りかけていた。生徒も大変リラックスできたようで、途中で眠りに落ちる生徒も見られた。「鶴丸生は黙っていても頑張る。だからこそ、心身の力を適切にコントロールしながら抜くことが大切」とおっしゃっていたことが印象的であった。